

金貝遺跡は、湖東地域の東近江市に所在する遺跡です。市域の中では旧八日市市にあり、愛知川中流域の右岸に位置しています。

これまで遺物の散布地として知られていましたが、平成18年度から始まったほ場整備や八日市新川の工事に先立って行われた発掘調査で多数の掘り立て柱建物などが見つかり、奈良時代から平安時代の集落跡であることがわかりました。また、灌漑用の水路も見つかりました。

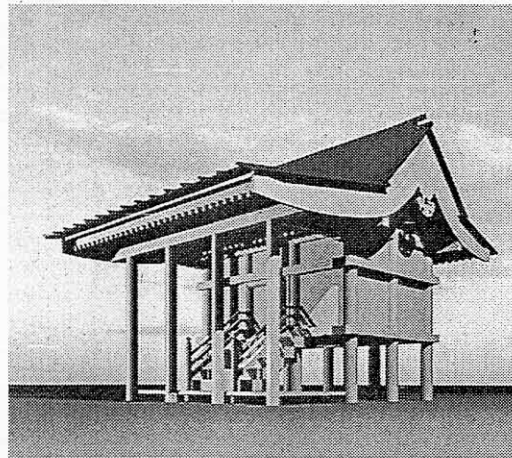
発見された数棟の建物跡の中に、神社跡とみられる遺構があります。三間×二間の母屋に、庇が南東側に付くもので、おおむね6.5m×7.5m(庇の長さ3.5m)の規模を測ります。庇を支える4本の柱のうち、中央にある2つの柱穴の内側には、他のものよりやや小さい柱穴が近接して認められました。庇の長さが母屋の柱間より長く、庇の内側にある柱穴が階段の高欄(手す

り)親柱とみられることから、三間の正面に屋根を葺きおろした庇が付く「三間社流造」の神社構造と考えられます。周辺にある遺構や遺物などから、平安時代前半のものと考えられます。

流造は、現存する神社本殿の形式では最も多くみられ、全国的に広く分布しています。県内でも三間社流造が圧倒的に多く、国宝の苗村神社西本殿(竜王町)などがその代表です。

有名な上賀茂神社と下鴨神社の本殿(京都市)も三間社流造で、古式様式を残しています。この形式の社殿の成立は平安時代初期にまでさかのぼるとされますが、上賀茂神社に関する鎌倉時代末の絵図に描かれたものが確実な例とされています。また、香川県坂出市にある神谷神社本殿は鎌

## 金貝遺跡の神社遺構



金貝遺跡の三間社流造の神社復元図  
(大上直樹・大阪人間科学大学准教授作成)

三間社流造の柱跡



倉時代の建保7年(1219)の建立とされるもので、現存する最古の例として知られています。今回金貝遺跡から見つかった神社遺構はこれらよりさらに古く、この形式の神社跡とすれば最古の例となります。

柱の配置や建物の規模は、賀茂社の本殿に類似しています。しかし、大きな違いがあります。見つかった神社遺構は掘り立て柱であるのに対し、賀茂社は木で組んだ土台の上に柱が建てられており、このことが流造の本殿が持つ

基本的な特徴とされてきました。しかし、今回の事例は、伊勢神宮正殿などと同様に掘り立て柱の流造社殿が存在したことを示すものとして注目されます。

これまでの調査から、金貝遺跡では水路を開削し、愛知川から水を得て、大規模な水田開発を行っていたとみられます。その用水路の設置や水田開墾に力を注いだ人々が精神的なより所とし、豊かな収穫が得られることなどを祈願して建立したのではないでしょうか。

金貝遺跡の近くに、式内社にあったとされる河桁御河辺神社が鎮座しています。今回見つかりました神社遺構との関係について、研究を進めていく必要があります。

なお、神社の建築構造や歴史、さらに愛知川周辺の古代の開墾などを考える上で、今回見つかりました神社跡は大変貴重な遺構として、地元の方々をはじめ多くの関係者のご理解とご協力により、現地に保存されています。  
(財団法人滋賀県文化財保護協会 中村智孝)

# 開墾に励んだ人々の精神的より所か